

2025 年 11 月 30 日 説教「地には平和をとほ」

ルカの福音書 12 章 49～53 節

神の国を求めること、宝を天に積むこと、目を覚ましていることなどを教えられたイエスは、前段においては、忠実な賢い管理人のたとえを通して、主の再臨を忠実に待つ信仰を示してくださいました。

1. 火が燃えることを (49 節)

① 地に火を (49) 「わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。」

激しいお言葉です。主イエスは、「地に火を剥げ込むために」来られたというのです。バプテスマのヨハネは、主イエスについて自分よりも力ある方であり、「その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」(マタイ 3:12) と伝えました。「火」は何かを燃やす力を持ちます。火は聖霊の働きです。そして、その火は審判をももたらすものです。ここでの「火」は恵みをもたらし、罪をも明らかにするのです。

② 火が燃えていたらと (49) 「その火が燃えていていたらと、どんなに願っていることでしょう。」

それでは聖霊の火は燃えているのでしょうか。イエスは「燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう」と言われていますから、その時点では燃えていないということになります。使徒の働き 2 章にある、聖霊降臨の出来事は聖霊の火が燃えだし、恵みが広がり出したことを示していると考えられます。

2. イエス・キリストの問題提起 (50～51 節)

① イエス・キリストが受ける苦しみ (50) 「しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。」

後からみれば、聖霊降臨があるのはわかるのですが、そこに至るまでには大きな出来事を経なければならぬのです。イエスは言われます。「わたしには受けるバプテスマがあります」。ここでのバプテスマとは十字架という大きな痛みです。主イエスは十字架を受けるご覚悟をもって「バプテスマ」と言われているのです。しかし、そこに至るまでには幾重にもわたるところのご苦難があるのです。それはすでに始まっていました。パリサイ人や律法学者などの責め立てがあり、それらはついには十字架への道をもたらすことになるのです。

② 平和を与えるために (51) 「あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。」

この問題提起は強烈です。「キリストこそ私たちの平和である」(エペソ 2:14) とありますが、ここで主イエスは、「地に平和を与えるために、わたしが来たと思っているのですか」と弟子達に問われています。「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え」(使徒 10:36) ともあります。イエス・キリストを伝えることは、すなわち、イエス・キリストが平和の主であることは間違いないのにこのお言葉はどういう意味なのでしょう。

③分裂を（51）「**そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。**」

さらにお言葉のパンチは増して行きます。平和ではなく、「むしろ分裂です。」と言われるのです。祈禱会で第一コリントを読んでいます、コリントの教会の分裂分派騒ぎがたしなめられています、そのような分裂も主からですか。それは明らかに違いました。教会の人々の身勝手、自己中心、自己主張などが分裂をもたらしていたのです。それでは、主イエスはここで何を言わんとしているのでしょうか。疑問が募ります。

3. 主人（52～53 節）

①家族さえも（52）「**今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して別れるようになります。**」

主のお言葉は、思いつきではありません。分裂について、さらに具体的に話しが進められたのです。一家が五人いるとします。そのうち、三人と二人が角を突き合わせる。二人が三人に敵愾心を燃やすなどということがあるということです。それも家族の中においてです。

②対抗する家族（53）「**父が息子に、息子が父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して別れるようになります。**」

話しはさらに具体的にになります。父が息子に対して、息子が父に対して対抗するというのです。さらに、母は娘に、娘は母に対抗するというのです。また、嫁はしゅうとめに対抗すると。親子間の対立。様々な場合があります。親への恨みを持つ子供、こんな子に育てたつもりはなかったと思う親。考えてみれば、あのイサクの妻リベカはヤコブをひいきににし、ヤコブが長子の権を奪うのに加担し、結果としてヤコブは遠くの地に逃れ両親やエサウとも会えないこともありました。他にも例はたくさんあります。しかし、それらは、人間の罪から出たものでした。ところが、今朝の話は、主イエスが分裂をもたらすという話なのです。いったいどういうことなのでしょう。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所を読んで、「イエス様なぜですか」と問う人もあるでしょう。この聖書箇所を讀いた人も知っています。イエス・キリストはどうしてこんなにひどいことを言うのかと言う人もいました。論語のなかに、「礼の用は和を貴しと為す」（1:12）という言葉があります。礼の働きとしては調和が良いといった意味です。ところが、ここで主イエスは、「**地に平和を与えるためではなく、むしろ分裂を与えるためである**」とあって、**家族の分裂まで述べられているのです**。「父と母を敬え」と十戒の教えとどのように整合性があるのかといった思いを持つ方もいるでしょう。

イエス・キリスト御自身、「平和をつくる者は幸いです」（マタイ 5:9）と教えられています。また、イエスが誕生した時には、天の軍勢が神を以下のように賛美しました。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」（ルカ 2:14）。平和はキリストの福音の基調でもあるのです。今週は 2025 年、第一回目のアドベント礼拝ですから、平和の主を高らかに宣言したいところですが、導かれた聖書箇所はここでした。しかし、ここにこそ福音の大切なメッセージがあるのです。

キリストの福音は犠牲の愛を示していますが、愛の主キリストに従うことも教えています。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、わたしについて来なさい」（ルカの福音書 9:23）。ここに、キリストについていく道と、キリストに背を向けて歩むという二つの道が生じます。自分がキリストに従う道をとった時に、家族のだれかが別の道をとれば、そこには一致ではなく、不協和が生まれることもあるでしょう。相違が生まれることは当然です。和を貴しとしますが、主の福音はさらに貴しとしなければならないのです。また、この聖書箇所が、国際間の争いを容認していることにはならないことは言うまでもありません。

私は高校二年生のクリスマスに洗礼を受けました。福音についてはよく理解していませんでした。そこで、生活も考え方も以前のまま、友人とあまりぶつかることはありませんでした。しかし、福音に目覚めて、主の前に悔い改めてキリストに従う道を選びました。卒業し、高校時代の仲間が集合することになった時に、皆の前で証しをしたのですが、「キリスト教に武装された梶川は魅力がない」と言われてしまいました。その後、その仲間たちとは、親しくすることはできなくなってしまいました。一方、多くのクリスチャンと知り合うことになり、福音の恵みをたくさん知ることになりました。私がクリスチャンとして成長するために、高校時代の友人たちとの交流が薄くなるという犠牲を経なければなりません。もっとも、数十年経って、その友人達と再会し、福音を含め、現在を伝えることができました。

キリストは平和の主です。クリスマスは平和の主を喜ぶ時でもあります。しかし、キリストによる真の平和は、十字架の福音に基づきます。キリストが私達の罪のために、身代わりとなって死んでくださったという福音にこそ、真の平和があるのです。それは人間に基づくものではありません。「彼らは、平安がないのに、『平安だ』と言っている。」（エレミヤ 6:14）とありますが、揺るぎない平和は、キリストの十字架と復活の福音以外からはもたらされないのです。その福音に立つ時に、たとい一時的に衝突するようなことがあったとしても、うろたえる必要はありません。なぜなら、真の平和の主であるイエス・キリストがあなたと共にいてくださるからです。そして、平和の主は「**二つのものを一つにし、隔ての壁をうちこわし、敵意を廃棄してくださる**」（エペソ 2:14、15）のです。真の平和を与えてくださる主イエス・キリストに信頼していきましょう。また、今年も喜ばしい、平和の主を待ち望むアドベントとしていきましょう。